

# 青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻177号 令和2年(2020)8月17日 Vol.51 No.1



## トピック展示「1万6千年前のセイウチ化石」

令和2年3月4日(水)～3月29日(日)に当館エントランスホールでトピック展示を開催しました。この展示で紹介したのは、津軽海峡から初めて発見されたセイウチの牙化石1点です。

この化石は、2年前の平成30年3月17日に風間浦村蛇浦の漁師・五十洲勇さんが津軽海峡でアンコウ漁を行っていた際に、網にかかったものです。当初、ナウマンゾウの牙ではないかということで当館に連絡がきたことから、ゾウ化石の研究者である滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一館長の協力を得て調査を行いました。

調査の結果、ナウマンゾウの牙ではないことがわかり、さらにセイウチの牙である可能性が高まり研究が進められました。研究には同館の水生動物研究者・松岡由子さんにも加わっていただき、最終的にセイウチの左上顎の牙であることが判明しました。また、炭素を使った年代測定も行い、1万6千年前の化石という結果が得られました。

現在、地球上に生息するセイウチ類は1種で、北極圏に分布しています。牙の形態だけでは種を決めることができませんが、この牙化石が現生の

セイウチのものと仮定した場合、1万6千年前の津軽海峡は北極圏に近い寒さであったことが考えられます。

現在は、寒冷な時期と温暖な時期が周期的に繰り返される氷河時代の温暖期に当たりますが、約2万年前は寒冷期のピークでした。その後、温暖化が進みましたが、1万6千年前頃に、一時的に寒冷化したことがわかっており、この寒冷化によってセイウチが津軽海峡付近まで南下してきたのではないかと考えられます。

化石は、泳いできた魚が網目に刺さるように張られた刺し網にかかりました。また、化石の表面には様々な付着生物が見られ、中には生きているものもありました。その中には水深の浅い場所に生息する二枚貝もあったため、化石は網にかかる前に浅い場所にあり、そこから海底斜面を転げ落ちて網にかかった可能性があります。

このセイウチの牙化石は、新しく収蔵された資料を紹介する展示会で再度、展示する予定です。

(学芸課長 島口天)